

**講談師 田辺鶴瑛(たなべかくえい)が語る**

## 『ハリス夫人物語』チケット販売中(前売り1000円)

\*チケットは遺愛事務でも取り扱っています。

**2019年4月21日(日)14:00～遺愛講堂**

介護講談で有名な遺愛の卒業生(K26 回生)である田辺鶴瑛さんが、145周年記念式典の翌日4月21日(日)14:00から遺愛講堂で、遺愛の創設者ハリス夫人を中心に遺愛の歴史について講談して下さいます。

夫のハリス氏は宣教師であり、米国領事でしたが、札幌農学校のクラーク博士から頼まれて、内村鑑三(キリスト教思想家、文学者)、新渡戸稲造(国際連盟次長、東京女子大学学長、東大教授)、佐藤昌介(北海道帝国大学総長で遺愛学院初代理事長)らに洗礼を授けました。

彼らは日本の近代化に大きな影響を与えた人たちですが、特に内村鑑三は米国留学の際にハリス夫人に支えられ、自分の三大恩人の1人としてハリス夫人をあげていました。

新渡戸稲造も米国留学の際にはハリス夫人の実家でお世話になっており、久しぶりに日本の上野の不忍池で再会した時に、蓮の話で盛り上がりました。古今集の僧正遍照の蓮を詠んだ歌を新渡戸は思い出し「はちす葉の濁りにしまぬ心をもて」と上の句を口ずさむのですが、下の句がなかなか出てこないでいると、ハリス夫人は「なにかは露を玉とあざむく」と声静かに続けて、「あれはいい歌ですよ。」と言われたそうです。新渡戸は心ひそかにハリス夫人の博覧強記なるに感服したと語っていました。紀貫之の『土佐日記』を初めて英語に翻訳したのもハリス夫人です。



田辺鶴瑛さん

また、佐藤昌介は札幌農学校時代に函館を訪れた際、ハリスご夫妻から夕食に招かれ、おいしい食事をいただいただけでなく、ハリス夫人から信仰上の話や文学上の話を親しくでき、精神的に多大な影響を与えられたと述懐していました。

講談では他にどんなエピソードが出てくるか楽しみです。前座に鶴瑛さんの娘さんの銀次さんも講談をして下さいます。ぜひ多くの皆さんに聴いていただければと思います。

2019年2月26日(火)